

国際日本学研究所

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

国際日本学研究所においては、COVID-19 下において一層活発な研究活動が行われている。国際ワークショップ、公開研究会、研究会を多数開催し、ネットワーク・人材発掘、方法論・分野拡充の双方で研究を深化させた点が高く評価される。国際的な共同研究が飛躍的に進捗しており、今後のさらなる発展を期待できる。それと同時に、重点強化する研究分野や方法が明示されていくことが望ましい。

前年度に引き続き、科研費等外部資金の応募・獲得状況も良好で、出版物、学会発表等の研究成果についても、量・質ともに充実しており、研究成果に対する社会的評価が高い。オンライン研究会の告知やホームページの英語版の改訂などウェブサイトでの広報を充実することで公開性を高める取り組みが遂行されており、海外からの研究会への参加につながるような成果も現れている。研究所の性格からも、それを踏まえて、今後公開性の向上が一層期待できる。江戸東京研究センターとの研究や成果が重複 についても、こうした活動によって組織間の峻別が一定程度はかられていることから、今後それぞれの組織の位置づけの明示化が望まれる。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

COVID-19 の世界的流行により、2021年度においても研究会等の多くをオンラインで行わざるを得なかったが、結果的には対面の時よりも多くの参加者を得られた。国際日本学は、基本的に研究者の国をまたいだ移動を前提にすすめられる学問であるが、逆境時においても成果を出せることを実感できたのは大きな成功体験であった。今後もオンラインの利点は適宜活用していきたい。重点強化する研究分野として「現代日本」を念頭に置き、近現代日本の社会文化状況を扱った研究会企画（海外における着物、日本の町並み保存運動など）を複数回行った。アジアの研究者との連携強化は本研究所の課題の一つであったが、韓国在住の若手研究者が今年度のヨーゼフ・クライナー賞を受賞したことは、アジア地域において本研究所の知名度が上がった結果と認識している。また、2018年度の自己点検・評価において東南アジア方面の新規開拓が期待されるとあったが、布の交流についての研究会や、インドネシア出身の研究者の発表会などを行うことができた。今後も継続的に問題を考えていく。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際日本学研究所では、COVID-19 による活動への懸念によって、研究会等の多くはオンラインでの開催を余儀なくされたが、それがかえって対面時よりも多くの参加者を得られることになり、懸念は払拭された。それ以上に、オンラインという新たなツールを得たことで、より精力的に国際的な交流を行うことが可能となった。これらは結果的という部分があるとはいえ、国際日本学研究所の果敢な取組みの成果として高く評価できる。

2021年は、国際日本学研究所の重点目標としてきた「現代日本」を念頭に置いた活発な研究会が、海外における着物や布という具体的なテーマで開催され活発な活動がなされ、また、課題としてきたアジアの研究者との連携強化についても、第7回ヨーゼフ・クライナー賞を韓国の若手研究者が受賞したことがその具体的な連携強化の成果だといえる。これらは高く評価できる。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所(センター)の目的を適切に設定しているか。

1.1①研究所(センター)として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。2018年度1.1①に対応

はい

※理念・目的の概要を記入。

国際日本学研究所は、研究所として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的を設定している。具体的には、本研究所は、世界各地で学際的に開かれた「日本学」を結びつけ、総体として「日本学」に新たなダイナミックな展開をもたらすことで、「国際日本学」という新たな学問分野を確立してきた。その流れの中に、当研究所も最初から設立に参加した大学共同利用機関法人人間文化研究機構国際日本文化研究センターによる、「国際日本研究」コンソーシアム結成がある。「国際日本学」の国際的な認知にともない、今後は国際日本学の対象の拡大、新しい史資料の発掘、方法論の革新を目指

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

すことを目的としている。こうして「法政大学憲章」をふまえた、単なる実学にはとどまらない「自由を生き抜く実践」を体現する一翼を担うこととしている。

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1②に対応

※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

国際日本学研究所は例年、年度初めと年度末開催の運営委員会において、理念・目的の適切性を検証してきた。また年度途中でも、大きな企画に新たに取り組む際には、研究所の理念・目的との整合性を考慮に入れて、それが適切であるかどうかの検討を行ってきた。今後も同様のプロセスを経ていくことにしている。ここ数年は長年国際日本学研究所を担ってきた所員の退職が相次ぎ、新たなメンバーを迎え入れる時期にあたるため、研究所の理念や目的についてはあらためて議論し、修正も加えることとする。

1.2 研究所（センター）の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①研究所（センター）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2①に対応

はい

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

本研究所がCOE採択時に提起した、各国に存在する「日本学」を統合し、外から日本を様々な角度で分析するとともに、日本の中からは世界との相互通信によって、日本を客観化した、より深い日本研究を進めるという新しい形の日本学＝「国際日本学」は社会的に認知された。類似の名称を持った研究機関が作られ、「国際日本研究」コンソーシアムも結成された。今後は同じ方向性を持った研究機関や、海外の日本研究所機関との連携を深め、共同で大きな研究成果を積み重ねることが求められる。これまで本研究所が中心になってすすめてきたアルザス・日欧ワークショップを今後も継続しつつ、新たな研究者のネットワークを作っていく。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

国際日本学の進化を目指すためには、それなりの研究資金が必要であり、これまで本研究所が、その財源として連続して獲得してきた学術フロンティア推進事業、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業、そして私立大学研究ブランディング事業が終了してしまったことが、財源確保の上での現実的な問題点として指摘できる。国際日本学の研究水準を維持・向上させるためには外部資金の確保が求められるので、早急に対策を考えねばならない。その一方で、本研究所はエコ地域デザイン研究センターと連絡を取りながら、江戸東京研究センターの調査研究をも担っており、江戸東京研究にも多大なエネルギーを使っている。今後も兼務による負担過重の問題は残るため、役割分担や活動の見直しが必要である。

【理念・目的の評価】

国際日本学研究所は世界各地で開かれた近現代日本の社会と文化に関する「日本学」を学際的に結び付けてダイナミックに展開させることを目的に設立された。また、世代交代に伴いさらなる展開を具体化するうえで理念・目的を再検討する時期に来ている。

課題として挙げられている、国際日本学の進化を目指すために必要な財源確保は外部資金に求めざるを得ない現状にあって困難な課題ではあるが、コロナ禍で得たリモートによる活動を活かす方法が見つかった中で、これらを活かすうえでも財源は依然として喫緊の課題であると考えているため、一層の検討を期待したい。

2 内部質保証

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

研究所の運営委員会（学内の評価）

アルザスの欧州日本学研究所にて開催するシンポジウムの場合（国外の専門家からの評価）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

海外（とくに在欧）の研究者から直接意見を徴収できる場所はアルザスの欧州日本学研究所に限られているが、本研究所はその施設を優先的に利用できる権利を有しており、それをできるだけ有効活用することを考えている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

第三者評価の実施が課題であるが、これは財政的な問題も絡んでくるため、難航することが予想される。

【内部質保証の評価】

国際日本学研究所では、学内での各種運営委員会での評価が適切に行われている。海外でのシンポジウムでの専門家からの個別的な評価をもとにして、適切な活動がなされたことと判断したことは理解できる。組織的に実施される明確性に欠けるとはいえ、なかなか得られない声を大切にすることは質を保障していくうえで貴重な資料といえる。

質保証活動に関して、外部の第三者評価の定期的実施は、財政的な問題もあることから、認識のとおり難航必至と思われるが、やはり検討すべき課題として実施に向けて努力することが望まれる。

3 研究活動

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）2021年度1.1①に対応

※2021年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

1 研究会「海外における女性のキモノの表象－「見る」「見られる」「見せる」の歴史人類学－

開催日：2021年5月22日（土）13：00～14：30

実施形式：オンライン（Zoom）

テーマ：新しい「国際日本学」を目指して（10）：海外における女性のキモノの表象－「見る」

「見られる」「見せる」の歴史人類学－

内容：2018年度より「新しい「国際日本学」を目指して」を9回開催。「国際日本学」が認知されるようになった今、研究対象の時代・地域・分野を広げる段階として、2018・2019年度は歴史学系・哲学系・思想史系さらに文学系にまでわたる複合的な分野を扱う研究会を開催。2020年度以降は、経済学・政治学・社会学・人類学を主な対象とする Social Science International Japanese Studies (SSIJS：国際日本学における社会科学)の観点からの研究に注力している。今回は、女性のキモノが日本文化を象徴することとなった歴史的経緯および海外の日常生活におけるキモノの表象を検証した。

参加者：45名

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

報告者： 桑山敬己（関西学院大学社会学部教授／本研究所客員所員）

コメンテーター： 高田圭（本研究所専任所員）

司会： 山本真鳥（本学名誉教授／本研究所客員所員）

2 本学 大学院 国際日本学インスティテュートとの連携強化に向けた説明会

開催日： 2021年6月12日(土) 18:35~22:00

場所： 本学 大学院棟 講義室

テーマ： 本研究所の紹介

内容： 「国際日本学合同演習Ⅰ（授業担当教員：椎名美智教授）」の一環として、高田圭講師（本研究所専任所員）による説明会を実施。説明内容は下記の通り。

(1) 本研究所 学術研究員の制度について

本学大学院博士後期課程在籍者を本研究所学術研究員として委嘱する制度について説明。

(2) 若手研究者論文について

応募資格及び採用論文は本研究所研究成果報告集『国際日本学』に掲載されることを紹介。

(3) フランス・アルザス地域で開催される国際ワークショップについて

若手研究者による国際ワークショップについて紹介し、参加を募った。

(4) 国際日本学インスティテュートと本研究所との連携の可能性について

a 研究会等の共同開催

b 本研究所主催研究会等への招致

c 本研究所の研究成果報告集『国際日本学』への論文投稿 等

参加者： 60名

説明者： 高田圭（本研究所専任所員）

授業担当者： 椎名美智（本学文学部教授）

安孫子信・小口雅史・小林ふみ子（本学文学部教授／本研究所兼任所員）

3 研究会「東京と今和次郎：「動き」としての惑星都市論」

開催日： 2021年7月31日(土) 14:00~15:30

実施形式： オンライン(Zoom)

テーマ： 新しい「国際日本学」を目指して(11)： 東京と今和次郎ー「動き」としての惑星都市論

内容： 都市を「動き」として論じる現在の都市論と、1923年（大正12年）以降のモダン東京風俗研究「考現学」が混成された今和次郎編『新版大東京案内』の分析を通じて、近年注目される「惑星都市論」を批判的に捉え直し、今和次郎がすでに「惑星都市論」の視点から東京を描いていたことを明らかにした。

参加者： 56名

報告者： クリストフ・トゥニ（立命館大学教授）

コメンテーター： 陣内秀信（本学 江戸東京研究センター 特任教授）

司会： 横山泰子（本学理工学部教授／本研究所長）

4 シンポジウム「異域から国土へ」

開催日： 2021年8月4日(水) 17:30~19:30

実施形式： オンライン(Zoom)

テーマ： 異域から国土へ

内容： 日本にとって異域であった蝦夷地が、17世紀以降にヨーロッパ諸国や江戸幕府等によって作られた地図情報を通じて国土に包摂されていく過程を読み取ることができる。米家志乃布教授の研究成果『近世蝦夷地の地域情報／日北方地図史再考』を通して北方地図史の展開及び地図表現を通じた地域認識の意味や地図に現れる日本文化について議論を深めた。

参加者： 42名

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

報告者：米家志乃布（本学文学部教授／本研究所兼担所員）
 コメンテーター：森田喬（本学名誉教授）、横山泰子（本学理工学部教授／本研究所長）
 進行：福井恒明（本学デザイン工学部教授／江戸東京研究センター研究プロジェクト・リーダー）
 主催：本学江戸東京研究センター、共催：国際日本学研究所

5 アルザス・ワークショップ「日本研究とトランスナショナリズム」

開催日時：

- ・2021年10月29日（金）18時00分～00時15分（*日本時間 JST）
- ・2021年10月30日（土）18時00分～23時45分（*日本時間 JST）
- ・2021年10月31日（日）19時00分～00時00分（*日本時間 JST）

主催：

- ・法政大学国際日本学研究所（HIJAS）
- ・「国際日本研究」コンソーシアム（CGJS）
- ・アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）

場所：アルザス欧州日本学研究所（コルマル／フランス）

実施形式： 欧州在住者：対面，欧州以外在住者：オンライン（Zoom）

テーマ：日本研究とトランスナショナリズム

内容：本ワークショップでは、例年、人文社会科学分野で個性的な日本研究を展開しているヨーロッパ及び日本在住の若手研究者による最新の研究成果や研究課題等の報告を受け、議論を行っている。2021年度は、近年、人文社会科学分野において重要なアプローチとなっているトランスナショナリズムと日本研究との関係性について論じる事例報告を募集し、議論を行った。

参加者：57名

オーガナイザー及びコメンテーター（アルファベット順）：

安孫子信（HIJAS）、黒田昭信（ストラスブール大学/フランス）、ジョゼフ・キブルツ（CNRS-CRCAO /フランス）、レギーネ・マチアス（CEEJA /フランス）、高橋希実（ストラスブール大学/フランス）、高田圭（HIJAS）、小口雅史（HIJAS）、エーリヒ・パウエル（CEEJA /フランス）、サンドラ・シャール（ストラスブール大学/フランス）、鈴木裕輔（名城大学）、坪井秀人（CGJS）

6 シンポジウム「落語がつくる「江戸東京」イメージ」

開催日：2021年11月23日（火/祝）10:30～16:00

場所：市ヶ谷キャンパス S205 教室

実施形式：対面及びオンライン（Zoom）

テーマ：落語がつくる「江戸東京」イメージ

内容：本シンポジウムでは、落語や時代小説等の影響を大きく受けた「古きよき江戸」のイメージ形成過程を考察し、本センターの研究キーワードである「都市における公共性」との関連性を明らかにすることを目的としている。

参加者：68名（対面及びオンライン合計）

報告者：川添裕（横浜国立大学名誉教授）、田中敦（落語名所探訪家）、
 金原瑞人（法政大学社会学部教授）、田中優子（本学名誉教授／本研究所客員所員）、
 中丸宣明（本学文学部教授／江戸東京研究センター兼担研究員）

ディスカッサント：栗生はるか（江戸東京研究センター客員研究員）

司会：横山泰子（本学理工学部教授／本研究所長）

主催：本学江戸東京研究センター、共催：国際日本学研究所

7 研究会「なぜ保存するのかー日本における町並み保存運動の勃興とその意味」

開催日：2021年11月27日（土）14:00～15:30

場所：市ヶ谷キャンパス ボアソナーダタワー A会議室

実施形式：対面及びオンライン（Zoom）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

テーマ：新しい「国際日本学」を目指して(12)：なぜ保存するのかー日本における町並み

保存運動の勃興とその意味

内容：本研究会では、都市環境における「変化」は社会的にどのようにコントロールされているか、小樽運河保存運動を事例に、建築学や都市計画学が扱ってきた「町並み保存」「歴史的環境保存」というテーマを、社会学の視点から捉え直した。本研究会は、欧米とは異なる日本の「新しい社会運動」の特徴といえる小樽の運河保存運動を丹念に明らかにする日本研究であった。

参加者：27名（対面及びオンライン合計）

報告者：堀川三郎（本学社会学部教授／2022年4月1日より本研究所兼任所員）

コメンテーター：米家志乃布（本学文学部教授・本研究所兼任所員）

司会：高田圭（本研究所専任所員）

8 研究会「海外に普及した日本のアニメーインドネシアにおける「NARUTO -ナルト-」の受容ー

開催日：2022年2月26日(土)14:00～15:30

実施形式：オンライン(Zoom)

テーマ：新しい「国際日本学」を目指して(13)：海外に普及した日本のアニメーインドネシアにおける「NARUTO -ナルト-」の受容ー

内容：日本の独自文化である忍者の生きざまを描く『NARUTO』は、インドネシアにおいて支持率の高い作品である。本作品を視聴した世代が成長し、日本の文化をより良く知ろうと日本語を学ぶ等、『NARUTO』は日本を身近に感じさせる重要な役割を果たしてきた。漫画やアニメーションが単なる娯楽ではなく日本の魅力をより具体的に伝える媒体となることが示され、国際日本学研究所の可能性を広げる機会となった。

参加者：22名

言語：英語（通訳あり）

報告者：イルマ・サウィンドラ・ヤンティ（本研究所客員学術研究員／インドネシア大学人文科学部講師）

通訳：高田圭（本研究所専任所員）

コメンテーター：鈴木裕輔（本研究所客員所員／名城大学外国語学部准教授）

司会：横山泰子（本学理工学部教授／本研究所長）

9 シンポジウム「東アジア近世・近代都市空間のなかの女性」

開催日：2022年2月28日(月)10:30～17:00

実施形式：オンライン(Zoom)

テーマ：東アジア近世・近代都市空間のなかの女性

内容：本シンポジウムでは、女性にとって都市とはどのような場所であったのか、近世から近代の東アジア文学をもとに考察した。

参加者：74名

報告者：

山田恭子（近畿大学）、仙石知子（二松学舎大学）、岩田和子（本学法学部教授）、

小林ふみ子（本学文学部教授／本研究所兼任所員）、高永爛（全北大学校）、

呉翠華（元智大学）、藤木直実（本学兼任講師）

ディスカッサント：

横山泰子（本学理工学部教授／本研究所長）、染谷智幸（茨城キリスト教大学）、

中丸宣明（本学文学部教授）

総合コメント及び討論：

大木康（東京大学）・田中優子（本学名誉教授／本研究所客員所員）

主催：本学江戸東京研究センター、共催：国際日本学研究所

10 研究会「キモノが伝統になるときー昭和の室町問屋と職人たちー」

開催日：2022年3月12日(土)13:30～15:00

実施形式場所：オンライン(Zoom)実施

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

テーマ：新しい「国際日本学」を目指して(14) キモノが伝統になるときー昭和の室町問屋と職人たちー

内容：2021年5月22日に開催した研究会「海外における女性のキモノの表象」では、キモノが海外で日本を示す記号として扱われる経緯を学んだ。今回は、経営史の視点から、京都呉服業界における染呉服と友禅の歴史を考察した。社会科学の観点からの国際日本学研究は、特殊日本的と思われがちな日本の伝統を発展させ、新たな伝統として普遍化する可能性を発見する機会となった。

参加者：50名

報告者：岡本慶子（本学経営学部教授／本研究所客員所員）

コメンテーター：田中優子（本学名誉教授／本研究所客員所員）

司会：山本真鳥（本学名誉教授／本研究所客員所員）

11 「第7回ヨーゼフ・クライナー賞法政大学国際日本学賞」授賞式及び記念講演会

開催日：2022年3月9日(水) 17:00～18:30

実施形式：オンライン(Zoom)

目的：本研究所の貢献者ヨーゼフ・クライナー博士の業績顕彰及び「国際日本学」発展のため、海外の優れた日本学研究者奨励を目的としている。

参加者：28名（参加者は本研究所 web サイトにて広く募っている）

受賞者：金 志映 (KIM Jiyoung) 氏（ソウル大学日本研究所 PD 研究員（韓国））

記念講演題目：日本文学の〈戦後〉と変奏される〈アメリカ〉

講演内容：文化冷戦の代表的事例：ロックフェラー財団の文学者留学制度を取り上げ、占領期から冷戦期にかけての日本の文学空間を、日本を親米的な民主主義国家にすることを企図したアメリカの文化攻勢が強く働いた場として捉え、戦後日本文学における「アメリカ」の問題を考察した。

参考：過去の受賞歴

・第1回（2015年度）、第2回（2016年度）、第4回（2018年度）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

https://hijas.hosei.ac.jp/page_symposium/2021eventreport

3.1②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）2021年度1.1②に対応

※2021年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

1. 出版物等

(1) 研究成果報告集『国際日本学』第19号（2022/2/10 編集・発行：国際日本学研究所）

a 研究成果報告

- (a) 『銀座を歩く寺田寅彦ー生活と科学の交差点』(横山泰子)
- (b) 『コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと国際日本学』(高田圭)
- (c) 『自民党石橋派の盛衰』(鈴木裕輔)
- (d) 『規範概念としての社会』(徐玄九)

b 「国際日本学研究所 2019年度若手研究者研究論文」採択論文

- (a) 『イングランドのチャップブックと近世日本の絵入り本ーThe World Turned Upside Down と『無益委記（無題記）』を通してー』(大島結生)
- (b) 『天正本『太平記』卷三十八「政道雑談事」の現実認識ー卷三十五以降の考察を通してー』(李章姫)

c 書評

『河内祥輔・小口雅史・M・メルジオヴスキ・E・ヴィダー共編『儀礼・象徴・意思決定ー日欧の古代・中世書字文化ー』
ー日本史の立場からー (市大樹)
ー西洋史の立場からー (大貫俊夫)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- (2) 小林ふみ子『水都としての東京とヴェネツィア』(法政大学江戸東京研究センター編, 第一部「地誌と絵本挿絵のなかの江戸」執筆ほか3章翻訳監修 61-87, 107-144, 285-311 法政大学出版局 2022/01978-4-5887-8013-4)
- (3) 小林ふみ子『墨水四時雑詠停雲会 (小林ふみ子・佐藤温・杉下元明・日原傳・堀口育男) 田崎草雲隅田川図解説、夕陽楼主人序、生方鼎齋題辭、第11・17・23首 61-62, 70-71, 75-76, 92-94, 103-104, 113-114 太平書屋 2021/09』
- (4) 小林ふみ子『の文人 石川淳の世界』(田中優子・小林ふみ子・帆苺基生・山口俊雄・鈴木貞美 第2章 石川淳の〈江戸〉をどう見るか p61-102 集英社 (集英社新書) 2021/04/16)
- (5) 米家志乃布『水都としての東京とヴェネツィア: 過去の記憶と未来への展望』ローザ・カーロリ, 小林ふみ子, 陣内秀信, 高村雅彦監修 法政大学江戸東京研究センター編第2部 絵地図における首都東京の風景表象 - 江戸から明治へ 165-181 法政大学出版局 2022/01/26
- (6) 米家志乃布『近世蝦夷地の地域情報 - 日本北方地図史再考』米家志乃布法政大学出版局 2021/05/25978-4-588-38201-7
- (7) 堀川三郎 『“Do as Democracy Demands: The Irony of an Historic Preservation Movement and Its Relevance for Popular Sovereignty in Postwar Japan,” in Helen Hardcore et al., eds., Japanese Constitutional Revisionism and Civic』 ActivismSaburo Horikawapp. 279-289Lexington Books2021/06/15978-1-7936-0904-5
- (8) 堀川三郎『Why Place Matters: A Sociological Study of the Historic Preservation Movement in Otaru, Japan, 1965-2017』 Saburo HorikawaSpringer2021/06/01978-3-030-71599-1
- (9) 横山泰子『禍の大衆文化 天災・疫病・怪異』小松和彦、福原敏男、香川雅信、高橋敏、伊藤慎吾、高岡弘幸、斎藤純、横山泰子、香西豊子、川村清第7章 259-284 株式会社 KADOKAWA2021/07/28978-4-04-400564-1

2. 論文

- (1) 高田圭「グローバル地域研究としての国際日本学—日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法—」(『国際日本学研究所研究成果報告集 国際日本学』18, 3-36, 2021/02/26)
- (2) 高田圭, 「Book Review on “Amorphous Dissent: Post-Fukushima Social Movements in Japan”2021/07/01Kei TakataInterface: A Journal for and about Social Movements13/ 1, 389-392 (MISC) 単著」
- (3) 小林ふみ子「書籍紹介 ロバート・キャンベル編著『日本古典と感染症』(2021年、角川ソフィア文庫) 2022/01 小林ふみ子浮世絵芸術 183, 59- (MISC) 書評, 文献紹介等単著」
- (4) 「シンポジウム 「つながる喜び: 江戸のリモート・コミュニケーション」報告 2021/07 神楽岡 幼子, グラムリヒ=オカ ベティーナ, 辻村 尚子, 菱岡 憲司, 神作 研一, 小林ふみ子 近世文芸 114, 61-68」
- (5) 米家志乃布「名所図会の挿絵・写真にみる「旧観」江戸と「新景」東京」2022/03/20 法政地理 54, 71-76 (MISC) 総説・解説 (大学・研究所紀要) 単著
- (6) 米家志乃布「近代東京の銅像と都市景観 - 銅像写真集『偉人の俤』を中心として -」2022/03/10 法政大学文学部紀要 84, 71-88 研究論文 (大学, 研究機関紀要) 単著
- (7) 米家志乃布「北海道江差 - 北前船の終着地」2021/08/01 地図情報 41/ 2, 4-7 (MISC) 総説・解説 (商業誌) 単著 地図情報センター
- (8) 大野ロベルト「英語圏における『土佐日記』受容史の概略 (戦前編) —アストンとハリスを中心に」2022/04 異文化 (論文編) 23, 153-182 研究論文 (大学, 研究機関紀要) 単著

3. 学会発表等

- (1) 高田圭「トランスナショナルに考える国際哲学特講」2022/02/08 公開講演, セミナー, チュートリアル, 講義等
- (2) 小林ふみ子「雅俗の融和はなにを意味するか 大田南畝から考える」『雅俗』復刊10周年記念シンポジウム 雅俗論のゆくえ—新しいパラダイムの創成をめざして—2021/12/26 シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)
- (3) 小林ふみ子「An antiquarian society: Interest in 'ordinary' old artefacts as a complement to traditional court scholarship16th International Conference of the European Association for Japanese Studies」2021/08/252021/08/24-2021/08/28 シンポジウム・ワークショップ パネル (公募) Part of a panel with Margarita Winkel (Humanities-Leiden University), Maki Nakai (Meiji University) and Bettina Gramlich-Oka (Sophia

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

University) titled: Appropriating and expanding court traditions : scholarship practices of late Tokugawa Japan

(4) 米家志乃布「名所と視覚的経験 - 江戸/東京の風景シンポジウム「EToS がつくる新・江戸東京研究の世界」」
2021/09/19-2021/09/19-2021/09/26 口頭発表 (招待・特別)

(5) 米家志乃布「近世蝦夷地の地域情報/日本北方地図史再考「近世蝦夷地の地域情報/日本北方地図史再考」出版記念シンポジウム 2021/08/04」

4. その他

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・本学学術研究データベース

3.1③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）2021年度1.1③に対応

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対する 2021 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2021 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。なお、研究所（センター）に該当するものがない場合は、研究所員によるものを含めることが出来る。但し、この場合は研究所の研究領域に関係するものとする。

1. 書評

(1) 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：佐藤信， 媒体名：読売新聞， 書評掲載年月：2021 年 7 月 25 日

(2) 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：齋藤忠光， 媒体名：日本地図学会『地図』59-2， 書評掲載年月：2021 年 8 月

(3) 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：佐々木利和， 媒体名：北海道新聞， 書評掲載年月：2021 年 9 月 5 日

(4) 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：小野有五， 媒体名：(財)地図情報センター『地図情報』159， 書評掲載年月：2021 年 11 月

(5) 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：小野田一幸， 媒体名：歴史地理学会『歴史地理学』64-4， 書評掲載年月：2021 年 11 月 20 日

(6) 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：宮田純， 媒体名：図書新聞第 3525 号， 書評掲載年月：2022 年 1 月 1 日

(7) 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：上杉和央， 媒体名：人文地理学会『人文地理』74-1， 書評掲載年月：2022 年 3 月 31 日

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

法政大学江戸東京研究センター2021 年度事業報告書

3.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）2021年度1.1④に対応

※2021 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

行っていない

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況 2021年度1.1⑤に対応

※2021 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金及び 2021 年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者（代表・分担の別）、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を箇条書きで記入。

1. 2021 年度中に応募した科研費 14 件

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

(1) 研究代表者 4件

- ・米家志乃布 基盤研究(C) 近代日本のアートと地理空間—メディア表象とパブリックアート体験にみる都市と地方 3年間総額 4,992千円
- ・堀川三郎 基盤研究(B) (一般)「建築」社会から「減築」社会へ——人口減少時代における都市政策の日米比較 3年間総額 8,269千円
- ・田中優子 基盤研究(S) 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究 5年間総額 150,580千円
- ・岡本慶子 基盤研究(C) 友禅デザインと京都染呉服商のマーケティング戦略(1900—1965) 4年間総額 4,575千円

(2) 研究分担者 10件

- ・高田圭 基盤研究(B) 「顔の見えない定住化」再考：周辺部労働とグローバル化の都市間比較
- ・小林ふみ子 基盤研究(S) 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 近世後期の好古・考証研究の源流と展開に関する学際的国際共同研究
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸時代中・後期 真景表現の受容と展開に関する基礎的研究
- ・米家志乃布 基盤研究(S) 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
- ・米家志乃布 基盤研究(B) 古文献解説・遺址調査・GIS分析の融合による前近代中国幹線交通路の環境史学的研究
- ・西塚俊太 学術変革領域研究(A) 自立と共生をつなぐ理論的基礎の創出に関する研究
- ・西塚俊太 学術変革領域研究(A) 比較思想的研究に基づく世代包摂的な社会の基礎の解明
- ・西塚俊太 基盤研究(B) 近代日本の幸福観
- ・横山泰子 挑戦的研究 妖怪絵本を活用した日本語学習者向けのオンデマンド日本文化教育教材の開発

2. 2021年度中に採択を受けた科研費 25件

(1) 研究代表者 15件

- ・高田圭 国際共同研究加速基金(帰国発展研究) 日本のコスモポリタンな60年代運動における第三世界とのつながりとその意義 2020-04-01～2022-03-31 1,640,000円(18K19957)
- ・小口雅史 基盤研究(B) 古代末期防御的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築 2019-04-01～2023-03-31 2,300,000円(19H01297)
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究 2020-04-01～2025-03-31 500,000円(20K00298)
- ・大塚紀弘 基盤研究(C) 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究 2019-04-01～2024-03-31 600,000円(19K01001)
- ・松本剣志郎 基盤研究(C) 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究 2018-04-01～2022-03-31 1,600,000円(18K04545)
- ・大野ロベルト 若手研究 『土佐日記』英訳に関する基礎的研究 2019-04-01～2022-03-31 1,600,000円(19K13150)
- ・高澤紀恵 基盤研究(C) 近世フランスの教区の動揺と絶対王権—パリの事例から考える 2020-04-01～2025-03-31 300,000円(20K01063)
- ・山中玲子 特別研究員奨励費 世阿弥伝書のデジタル写本の作成および書承・伝播・受容の分析 2021-04-01～2024-04-01 400千円(21F21702)
- ・山中玲子 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築 2021-04-05～2025-03-31 4,500,000円(21H04350)
- ・宮本圭造 基盤研究(B) 近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究 2020-04-01～2025-03-31 1,200,000円(20H01234)
- ・安孫子信 基盤研究(C) オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究 2019-04-01～2022-03-31 3,300,000円(19K00116)
- ・山本真鳥 基盤研究(C) オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究 2019-04-01～2023-03-31 1,000,000円(19K01208)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国における腐敗パラドックスに関するシステム／制度論的アプローチ 1,540,000 円 (17H01638)
- ・大澤ふよう 基盤研究(C) フリーライダーと二次的文化化：構造変化としての文化理論の構築に向けて 2018-04-01～2022-03-31 1,900,000 円 (18K00665)
- ・鈴木多聞 基盤研究(C) 占領下の宮中グループの戦争観と平和観 2019-04-01～2024-03-31 400,000 円 (19K00993)

(2) 研究分担者 10 件

- ・小口雅史 基盤研究(B) 料紙分析の手法による中国古文書学の基盤構築とその応用 2020-04-01～2024-03-31 560,000 円 (20H01298)
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究 2019-04-01～2024-03-31 30,000 円 (19K00530)
- ・赤石美奈 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01～2023-03-31 20,000 円 (20K00136)
- ・大野ロベルト 基盤研究(B) 視覚・聴覚等に障害をもつ人の英語能力の測定法の開発 2020-04-01～2025-03-31 150,000 円 (20H01289)
- ・高澤紀恵 基盤研究(A) 共和政の再検討：近代史の総合的再構築をめざして 2021-04-01～2026-03-31 50,000 円 (21H04365)
- ・高澤紀恵 基盤研究(B) 16、17 世紀のスペイン複合国家における公共善をめぐる多元的ダイナミズム研究 2020-04-01～2025-03-31 300,000 円 (20H01337-A)
- ・山中玲子 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01～2023-03-31 80,000 円 (20K00136)
- ・山中玲子 基盤研究(C) 古代・中世日本における廃墟の文化史 2020-04-01～2023-03-31 150,000 円 (20K00337)
- ・宮本圭造 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築 2021-04-05～2025-03-31 100,000 円 (21H04350)
- ・趙宏偉 基盤研究(A) 現代中国における腐敗パラドックスに関するシステム／制度論的アプローチ 2017-04-01～2022-03-31 300,000 円 (17H01638)

3 科研費以外の外部資金 1 件

(1) 研究代表者：小林ふみ子

交付元：鹿島美術財団 美術に関する調査研究助成
 研究課題：「江戸名所絵本における風景表現の研究」
 研究期間：2021 年 4 月～2022 年 3 月

(2) 研究代表者：米家志乃布

交付元：公益財団法人国土地理協会 学術研究助成
 研究課題：「千島・権太の地図出版史 - 日露比較研究」
 研究期間：2021 年 9 月～2023 年 3 月
 交付額：480,000 円

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料
- ・科学研究費データベース「KAKEN」
- ・本研究所所員からの報告 E メール本文
- ・本学学術研究データベース

3.1⑥研究所（センター）における研究活動に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。2021 年度 1.1⑥に対応

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

※取り組みの概要を記入。

研究会の大半をオンラインで開催している。通訳の必要が生ずる国際研究集会においては、オンラインでの発表は技術的に難しいことがあるが、研究所員が準備と努力を重ねたため、特に大きな問題もなく開催できるようになった。今後 Zoom やハイフレックスなどを用いて、感染状況に応じた様々な形態での研究活動を行うことが可能である。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

上記した多くの研究業績は、各所員の多様な業績の中から国際日本学に貢献するものを中心に選んでいる。ここに氏名が挙げられていない他の所員の研究業績ならびに、所員が兼務する江戸東京研究センターでの研究実績をも含めると、本研究所での相対的な研究レベルは特記できると考えている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

海外における日本研究の衰退傾向は従来から大問題であったが、COVID-19の影響で、外国で日本研究に携わる若手研究者の研究意欲や機会が奪われたことは憂慮すべきである。本研究所は国際日本研究コンソーシアムに加わり他の組織と連携しながら、様々な対策を講じているが、今後も更なる対策を考える必要がある。専任所員を中心に若手研究者の交流がすすめられており、コロナ収束後を見据え、可能性を探っていきたい。

【研究活動の評価】

国際日本学研究所の活動実績や研究成果は、いずれも COVID-19 禍にあってもそれを奇貨とした活動・実績を示していると高く評価できる。

たとえば、研究会5回、シンポジウム3回、3日間のアルザスワークショップの開催は昨年度と比べても十分な数といえる。テーマもアルザス・ワークショップで取り上げられた「日本研究とトランスナショナルリズム」や11月に開催された研究会の「日本における街並み保存運等の勃興とその意味」では「社会科学分野への拡大」という新たな分野への研究拡大が見られる。

社会的評価の指標である書評された出版物についてはやや絞られている感があるが、出版物等に関しては研究成果報告4件、論文採択2点ほか論文8件学会発表等5件など、研究成果は変わらず旺盛であると評価できる。

科研費など外部からの資金調達も多く実現しており、高く評価できる。

世界的な COVID-19 禍にあつて、ZOOM などによるリモート会議では乗り越えられない、対面による交流が、できないことが、外国で日本研究に携わることの物心両面の困難さを招いている様子であり、これをどう乗り越えるかは今後の取り組みに期待したい。

4 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

4.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどを配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018年度4.1①に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた

※教育研究支援体制の概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

本学においては、TA、RA等は外部資金を獲得しなければ導入できず、現在、TA、RAを設置する財源は本研究所には存在しない。しかしながら教育研究支援については、大学院人文科学研究科国際日本学インスティテュート所属の博士課程後期在籍の大学院生のために、学術研究員制度を設けており、多くの院生がそれを利用している。また同インスティテュート所属院生その他の若手研究者のために、副賞としての奨学金を含む若手研究者研究論文の制度を設け、広く投稿を募っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2022年度若手論文募集要項」

4.1②研究所（センター）として、教育研究環境の整備に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。

オンライン研究会の実施のため、機器（パソコン、ネットワークHUB、ヘッドセット、集音マイク）を整備。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

国際日本学は、研究分野の性格上、国内外の研究者との交流が必須である。コロナ禍で研究者の移動が難しい状況が続いているが、環境整備に取り組み、コロナ前とほぼ変わらない回数での研究会や会議を開催できた。この経験をもとに、コロナの終息後も適宜オンラインを活用すれば、さまざまな理由で長距離の移動が難しい研究者に対し、研究所の活動に参加をよびかけることができる。

（3）課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

国際日本学インスティテュートと本研究所は別組織であるが、連携を強めることで利点が多い。インスティテュートの学生は、卒業後、研究所の学術研究員となって研究活動を継続でき、研究所は若手の新しい研究成果を取り入れることができるからである。この利点はこれまであまり意識されていなかったようなので、2021年度にはインスティテュートに対して研究所についての説明会を開催した。院生に必要な情報が伝わるような試みを今後も継続し、周知につとめる。

【教育研究等環境の評価】

国際日本学研究所では、TAやRAなどの教育研究に活動を支援する資金は、本学の事情から外部からの導入に頼るしかない現状にある。この点を鑑みると、大学院人文科学研究科国際日本学インスティテュート所属の博士後期課程の院生への学術研究員制度の活用や若手研究者への奨学金付きの若手研究者論文制度の設定はTAやRAへの教育研究活動支援として有効であり、高く評価できる。

COVID-19への対応としてオンラインによる学習や研究会開催は適切な対策といえる。

若手の研究継続の受け皿として、今後も国際日本学インスティテュート所属の院生に向けて必要な情報を伝えるなど、積極的な交流を期待したい。

5 社会貢献・社会連携

（1）点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

5.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018年度 5.1①に

対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

国際日本学研究所が設立以来長年かけて作成し、学界および社会に向けて公開してきた公開してきた「データベースサービス」（内部呼称では「電子図書館」）は近年、他機関からも注目を集めるようになり、複数の連携希望の申し入れを受け、サーバー間でデータリンクが行われて他機関で公開されるようになってきている。また在欧日本仏教美術データベース JBAE は

海外の他機関や一般コレクターからのアクセスも多く、海外の所蔵品と日本の所蔵品の関係などについても JBAE の存在によって明らかになったものがあって、海外でも反響を呼んでいる。

また、研究会に一般市民や他大学の学生の参加が目立つようになった。特にオンラインでの催しにはこれまで本研究所の研究会のリピーターではなかった新規の参加者が見られ、本研究所の存在が認知されたことの証左と認識している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

本研究所公開データベースサービスとの連携を依頼してきたのは、国立文化財機構奈良文化財研究所や国立歴史民俗博物館といった当該分野で一線級の地位を占める研究組織であり、本研究の電子化資源を高く評価していただいている。また JBAE についても著名な海外機関との連携やデータ交換の希望を受けている。蒐集史資料の高精細画像のHPでの公開によって、著作物での引用申請もある。申請には可能な限りこたえ、社会貢献につとめたい。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

本研究所公開データベースはそれらを搭載しているサーバーのセキュリティ強化作業および運用システム更新作業のため、2021年3月8日より閲覧できない状況になっている。サーバーの再構築作業を進めつつ、担当所員が問い合わせに応じるなど、現状でできることを行っているが、一日も早い運用再開が望まれる。

【社会貢献・社会連携の評価】

国際日本学研究所が開設以来、広く公開してきたデータベースが近年多方面で注目されはじめ、外部機関とのデータ交換が行われ他機関のデータベースを通じて広く公開されてきたことは、学外組織との連携協力という点で高く評価できる。また、国際日本学研究所が管理する在欧の日本仏教美術データベース（JBAE）も専門研究者のみならず、学部学生や一般市民にも広く知られるところとなり、それらの方々のオンラインによる研究会などへの参加に結びついている点は社会貢献として高く評価できる。

今後は広く衆知を集める場としての情報発信に向けてより一層の取組みに期待したい。

6 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

6.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度6.1①に対応

はい
※概要を記入。
所長、専任所員、兼担所員を設置し、企画ごとに責任者をその都度設定している。法政大学国際日本学研究所規程（規定第707号）および関連する細則が設けられ、それにもとづいて所長、専任所員、兼担所員からなる運営委員会が設置され、定期的に会議が開催されている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
特になし

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
毎月一回定例で開催している運営委員会の出席率が低いのが問題点である。議事録等の書類を作成して所員に送り、情報を共有するようにつとめてはいるが、学部横断的な組織において多くの兼担所員が出席できる時間を確保するのは常に困難である。

【大学運営・財務の評価】

<p>法政大学国際日本学研究所規程・同細則が整備され、これに基づく運用が行われている。様々な企画を立て、企画ごとに責任者を都度設定するなどして、多くの所員の参画を促す努力が見られ評価できる。</p> <p>多くの所員が運営にかかわることは質保証にもかかわり重要である。研究所の運営を決定する運営委員会への出席率が低いことの理由の一つに学部横断的な組織で兼務所員が存在することがあるが、それでも議事録を作成して送付するなど最低限の情報共有を行っており、困難な中で努力している点は評価できる。出席率向上や出席率に示される所員の運営への関心の高さを確保するうえで、新たな工夫が今後の検討課題であろう。</p>

III 2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動					
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。					
	年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい方法による研究、新しい研究分野の開拓を目指す。					
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加					
	年度末報告	<table border="1"> <tr> <td colspan="2">執行部による点検・評価</td> </tr> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>従来の「国際日本学」研究を深めるとともに、社会科学分野の研究を重視し、6月、8月、11月、3月に人類学、社会学、経営学の研究者による研究会を企画開催できた。法政大学大学院国際日本学インスティテュートとの連携強化に向けた説明会や、修了生の研究発表の</td> </tr> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	S	理由
執行部による点検・評価							
自己評価	S						
理由	従来の「国際日本学」研究を深めるとともに、社会科学分野の研究を重視し、6月、8月、11月、3月に人類学、社会学、経営学の研究者による研究会を企画開催できた。法政大学大学院国際日本学インスティテュートとの連携強化に向けた説明会や、修了生の研究発表の						

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

			機会を設けた。国際日本文化研究センターと連携した研究事業を実施、兼担所員の EAJS の研究事業への参加を通じて、国内外の他の機関との連携を強化した。
		改善策	今年度は兼担所員等、新たな研究メンバーを迎えることができたが、次年度も外国人特別研究員の受け入れ等を行い、さらに協力者を増やしていく。
No	評価基準		社会連携・社会貢献
2	中期目標		社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後は、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。 社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。
	年度目標		本研究所自設 HP の英語頁の改修などを行い、より効果的な情報発信を目指す。研究会企画をオンラインでも開催し、コロナ禍においても多くの市民参加を可能とする。
	達成指標		研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		S	
理由		HP の改修を行い、英語ページを充実させることができた。HOSEI ミュージアムの展示に協力することができた。ウェブサイトのセキュリティ面を強化する必要が生じ、今年度から取りかかっている。	
改善策		ウェブサイトのセキュリティ面を強化する必要が生じ、今年度から取りかかっている。	
【重点目標】 従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい方法による研究、新しい研究分野の開拓を目指す。			
【目標を達成するための施策等】 対面に加え、オンライン研究会やシンポジウムを開催することにより、これまで招聘しにくかった研究者を積極的に招聘する。			
【年度目標達成状況総括】 専任所員を中心に国際日本文化研究センターとの協力で開催したアルザス欧州日本学研究所とのハイフレックスによる国際シンポジウム、定例研究会を実施し、実績を上げた。ヨーゼフ・クライナー博士記念法政大学国際日本学賞の授賞式と記念講演会を行う（3月）予定で、海外の日本研究者とのつながりを示すことができた。研究会は対面、オンライン両方を組み合わせるかたちで行い、これまで招聘しにくかった研究者の参加が実現できた。			

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>国際日本学研究所の 2021 年度目標（重点目標含む）は、昨年度中期目標・年度目標に関する評価での指摘（新研究分野や方法論を具体的に示してほしい旨の指摘）を受け止め、具体的な取組みであったと評価できる。たとえば、①本研究所の目的とする近現代日本文化の国際的な研究活動として、海外における着物をテーマにした複数回の研究会開催（その参加者数や学外報告者も考慮）、②2020 年度に続くアルザス・日欧ワークショップの開催において、そのテーマに人文社会科学分野での重要なアプローチとなっている「トランスナショナリズム」と日本研究との関係性を選択し取組んだこと、③『国際日本研究』コンソーシアムの諸活動、学外の研究者との連携の成果といえる外国人研究者の第 7 回ヨーゼフ・クライナー賞受賞といった取組み・成果に表れている。</p> <p>また、COVID-19 に関してはそれを奇貨としてオンラインによる研究会や国際シンポジウム活動を展開して、昨年度と同様、日本の近現代文化を核にしたアジア若手研究者の発表の場の提供・交流支援に努めて目標実現に向けて取組んだことは高く評価できる。</p> <p>ただ、新たな分野開拓と方法論に関して、一昨年見られた「日米関係」を扱った研究会は見られないように見受けられた。継続的な視点もあるかと思われ、今後に期待したい。</p>

IV 2022 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
----	------	------

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。
	年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい研究分野として「現代日本」に関する調査研究を行う。
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	研究所からの情報はHPを通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。
	年度目標	本研究所自設HPの英語頁の改修を行い、現在工事中のデータベースの再開を目指す。コロナ禍が終息せずとも、多くの市民参加が可能となるよう、適宜オンラインを活用した研究会を開催する。
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善
<p>【重点目標】</p> <p>「現代日本」に関する調査研究会を行い、新たな分野を開拓する</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>専任所員を中心に、学内外の研究者とともに研究会やシンポジウムを開催する。</p>		

【2022年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

国際日本学研究所の近現代の日本文化という目的に沿って、研究対象を人文科学から社会科学へと研究対象を拡大し、さらに現代へと拡大させて2022年度から2025年度の中期目標に臨むことは評価できる。日本学研究を目的とする国内外の機関と広く連携し、持てる文献等の資産を相互に活用できるネットワークを作る連携の取組みも評価できる。

現代に拡大する取組みについて、現代日本研究として何に取組むのか具体的なテーマを明らかにすることが期待される。新たな中期(2022-2025年度)目標を設定するうえで、個々の研究者のテーマでの研究会やシンポジウムとは別に環境保全やナショナリズムといったテーマを中長期のメインテーマとして検討することも重要であると思われる。テーマに継続性あるいは統一性のある取組みが見られることに期待したい。

【大学評価総評】

国際日本学研究所が行ってきた、布の交流についての研究会やインドネシア出身の研究者の発表会などを含む総合的な活動は、国際的に認知される国際日本学という学際的分野の研究の発展、および文献等の資料や人的交流の拡大の証しとして、高く評価できる。

ただ、こうした研究活動の拡大・発展に欠かせない財源をどう確保するのかについて、2021年度も科研費の応募・獲得などの成果に努力の跡がうかがわれ、それ自体大いに評価できるものの、十分な活動に必要な財源はまだ十分でないことがうかがわれ検討すべき課題は大きい。

国際日本学研究の日本学というキーワードに何を盛り込んでいくのか。人文分野に限らず広く社会科学や自然科学分野への拡大をいかにはかっていくのか。その検討と実践を通じて、各分野相互の連携・交流の要石として、際日本学研究所がさらに発展していくことを期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。